様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：２５２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０６３４

研究課題名（和文）非ネイティブ間のインタラクション―参加者の文化に注目して―

研究課題名（英文）The Interaction among Non-native Speakers in Light of Participants' Cultures

研究代表者
江口　真理子（Eguchi, Mariko）

島根県立大学・総合政策学部・教授

研究者番号：００２６９５２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は参加者の文化の違いがインタラクションに影響を与えるかどうかを調査することを目的とした。文化を共有するグループ同士のインタラクションと文化を共有しないグループ同士のインタラクションと比較することによって、異なる文化を持つ相手と交流している時のほうが、インタラクションが活発になるかどうかを検証した。「発話量」と「発話スピード」の観点から分析したところ、「発話量」に関しては文化の違いがインタラクションに影響を与えたが、「発話スピード」に関しては影響がなかった。インタラクションに影響を与えるその他の要因、英語の流暢さ獲得の困難さ、参加者の英語レベル、データの数について考察した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to investigate the effect of cultures on the interaction of participants. This study compared the uni-cultural interaction with the cross-cultural interaction in terms of two variables; namely, the amount of utterance and the speed of utterance. Using the data obtained from the videoconference of three pairs such as Japanese and Japanese, Japanese and Mexicans, and Japanese and Americans, It found out that the combination of different cultures positively influenced the amount of utterance, but it did not affect the speed of utterance. Factors that might have affected the interaction such as delayed effect on speech speed, levels of English proficiency, and the number of the samples were discussed.

研究分野：第二言語習得

キーワード：インタラクション　発話量　発話スピード　異文化　ビデオ会議　第二言語習得

１．研究開始当初の背景

コミュニケーションを重視する第二言語教育の基本原則の一つに、第二言語の習得にはインタラクションが有効であるという考え方がある。インタラクションとは、参加者同士が意思疎通することを目指して、情報のインプットとアウトプットを行う意味交渉活動を指す。インタラクションを通じて、第二言語の学習者は相手の言った言葉の意味をはっきりと理解することができるようになる。また、自分の言ったことが相手に通じなかったとき、言い方を変えて言い直すようにアプトプットを求められるために、言語の構造をよりよく理解することができるようになる。つまり、インタラクションには、第二言語の習得に不可欠である「理解可能なインプット」と「言語構造への気づき」を促進させる効果がある。

したがって、英語教育の現場では、インタラクションを刺激するタスクがよく用いられる。近年、日本の大学でも、情報ギャップを利用したタスクや意見交換のタスクが行われている。

インタラクションを活性化させるためのタスクは、日本の英語教育現場では、日本語を母語とする日本人同士で行われることが一般的である。日本のように同質性の高い社会において、日本人英語学習者が英語のネイティブ話者と交流をすることはほとんど不可能である。

本研究代表者はビデオ会議を介した英語による異文化交流の授業実践を通じて、日本人同士のインタラクションと外国人とのインタラクションが異なっているのではないかという印象を抱くに至った。その異文化交流授業では、日本人学生が、アメリカやメキシコ等の学生と英語で文化の話題について英語で意見を交換する。アメリカ人学生やメキシコ人学生が日本人学生に投げかける質問に対して、日本人学生はたどたどしいながらも持っている知識と英語力を総動員して、彼らの質問に答え、インタラクションは活発である。

ところが、日本人同士で英語のディスカッションを行う場合は、インタラクションが不活発な印象がある。日本人同士で質疑応答をするとき、答える者の英語による説明が不十分なものであったとしても、情報の明確化要求があまり行われない。また、日本人同士で英語のディスカッションをするとき、英語で言いにくいときは日本語で説明してしまい、英語でアウトプットする努力を怠ることが散見される。教師である本研究代表者自身の行動を振り返ってみると、たとえ日本人学生が発する英語表現が不十分であっても、相手の意図することが理解できてしまうために、相手に対してさらに詳しくアウトプットするように迫ることは少ないように思う。

そのような経験から、同じ母国語と文化を共有する者同士のインタラクションと、母国語と文化を共有しない者同士のインタラクションは異なっているのではないかと着想するに至った。

第二言語習得研究において、インタラクションの参加者の文化が論点となることはなかった。多くのインタラクション研究では、参加者は英語のネイティブと英語を学習している非ネイティブである。それは、非ネイティブはネイティブとインタラクションをすることが英語学習の基本であるという暗黙の了解があるからであろう。しかし、英語の国際語としての地位が確立した現在、母語が異なる非ネイティブ同士のインタラクションがこれから多くなってくると考えられる。母語が異なる非ネイティブ同士のインタラクションが英語習得に効果的だとしたら、それは、文化の差によって生まれる情報ギャップによるものかもしれない。

２．研究の目的

そこで、本研究はインタラクション研究において取り上げられることのなかった文化の違いに注目して、参加者の文化の違いがインタラクションに影響を与えるかどうかを調査することを目的とした。文化を共有するグループ同士のインタラクション(Uni-cultural interaction)と文化を共有しないグループ同士のインタラクション(Cross-cultural interaction)と比較することによって、異なる文化を持つ相手と交流している時のほうが、インタラクションが活発になるかどうかを検証した。文化の違いが自然な情報ギャップとなり、参加者の好奇心を刺激し、活発なインタラクションを導くと理論化した。

３．研究の方法

インタラクションに対する文化の影響を調べるために、日本語を母語とする者同士のインタラクション、日本語を母語とする者とスペイン語を母語とする者のインタラクション、日本語を母語とする者と英語を母語とする者のインタラクションの３つの組み合わせにおいて、インタラクションがどのように異なるかを考察した。

文化を共有する者同士のインタラクションは、文化を共有しない者と行うインタラクションよりも不活発であると仮説を立てた。日本人同士のインタラクションでは、文化を共有しているために英語が間違っていたり、相手からの情報が少なくても、お互いに意思疎通できてしまうため、インタラクションが不活発になると考えた。一方、文化を共有しない他者とのインタラクションにおいては、情報ギャプが生じ、明確化要求とネガティブ・フィードバックが引き起こされ、インタラクションが活性化すると考えた。

データの収集のために研究１と研究２の２回の調査を行った。研究１では、日本人と日本人同士の組み合わせ (Uni-cultural

Interaction)、および、日本人とメキシコ人の組み合わせ(Cross-cultural Interaction)によって、英語を使ったディスカッションを実施した。研究２では、日本人と日本人同士の組み合わせ(Uni-cultural Interaction)、および、日本人とアメリカ人の組み合わせ(Cross-cultural Interaction)によって、英語を使ったディスカションを実施した。

ディスカッションのトピックは「家族・伝統行事」「宗教」であった。

「インタラクションの活発さ」という概念は、研究１では、「発話の数」と「質問の数」と定義して測定した。研究２では「発話のスピード」と定義して測定した。データはビデオ会議を用いて日本人同士および日本人と外国人の英語によるディスカッションを実施し、そのディスカッションを録画した。その後、録画したものを文字化および電子ファイル化し、分析を行った。

４．研究成果

第１の研究においては、日本人同士のインタラクションよりも日本人とメキシコ人のインタラクションの方が、「発言の数」と「質問の数」の両方の側面で増加するという結果となった。

第２の研究においては、日本人同士のインタラクションよりも日本人とアメリカ人のインタラクションの方が、「発話スピード」が増加するという結果にはならなかった。

研究１に関しては、文化の違いが活発なインタラクションに結びついたが、研究２に関しては文化の違いによるインタラクションの違いは見られなかった。したがって、参加者の文化の違いがインタラクションの活性化に効果があるかどうかは、本研究から明確な答えを導くことはできなかった。

このような結果になったことを受けて、研究結果に影響を与えた様々な要因を検討した。その一つとして、文化の差がインタラクションにもたらす影響はすぐに現れないということが考えられた。「発話の数」や「質問の数」というインタラクションの側面はすぐに現れるが、「発話のスピード」のように英語能力と密接な関係があるインタラクションの側面の場合は、長期的な交流や英語学習の成果と考えられるため、短期的な効果としては現れにくいことが考察された。さらに、日本人参加者の英語のレベル、データの数に問題があるために、明確な答えが得られなかったという結論となった。

ただし、本研究は参加者の文化に注目したことによって、インタラクション研究の新しい領域を切り拓くことができた。今までのインタラクション研究は英語ネイティブと英語非ネイティブがインタラクションの参加者であるという前提があった。しかし、グローバル化が進行し、様々な母語を持つ非ネイティブ同士が英語を使ってコミュニケーションするようになれば、非ネイティブ同士、つまり、文化が異なる相手との交流がこれからますます増えることが期待される。文化の違いがインタラクションを活性化させるかどうかという論点はさらに探求されるべき問題であると確認された。

本研究で用いたICTを用いた教育は、グローバル時代にふさわしい新しい教育方法である。ICT を使うことによって遠く離れた人々の刺激的なインタラクションを教育に持ち込むことが可能となる。本研究では、この新しい教育方法のアウトリーチ活動を行った。2013年度は12月と2014年7月に島根県立大学にて、アメリカと台湾の研究者を招聘して国際会議を行った。中国地方の教育関係者が出席した。また、島根県立浜田高校において、6 回の出前授業を実施し、120 人に対して、ビデオ会議を用いて海外の学生と交流する体験を提供した。

これらのアウトリーチを通じて、日本のように同質的な文化を持つ国においても、ICTを活用することによって、外国の大学と日本の大学を結びつけることが可能であること、それによって活発なインタラクションを促進する教育方法を知らしめることができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① Mariko Eguchi, The Effect of Cross-cultural Videoconferencing on EFL Learners' English Production, Peer-reviewed, *Global Partners in Education Journal*, Vol. 4, No. 1, pp. 5-15. http://www.gpejournal.org/index.php/GPEJ/article/view/76, 2014.

② Mariko Eguchi, The Effect of Cross-cultural Videoconferencing on EFL Learners' English Production, Not Peer-reviewed,*Proceedings of East Carolina University and the University of Shimane*, pp. 24-32, 2013.

〔学会発表〕（計１０件）

① Mariko Eguchi, Changing Perspective of Japanese High School Students toward Chinese by Videoconferencing, Global Education Conference, http://www.globaleducationconference.com/forum/topics/changing-perspectives-of-japanese-high-school-students-toward-the.(Synchronous online conference), October 28, 2014.

② Mariko Eguchi, The Effect of Cross-cultural Videoconferencing on EFL Learners' English Fluency, 日

本メディア英語学会、愛知淑徳大学(愛知県名古屋市)、2014年10月26日

③ Mariko Eguchi, Changing Perspective of Japanese High School Students toward Chinese by Videoconferencing, Collaborative Langauge Teaching Conference, 島根県立大学（島根県浜田市)、2014年7月23日

④ Mariko Eguchi, Changing Perspective of Japanese High School Students toward Chinese, Global Partners in Education 7th Annual Conference, Universidad Regiomontano, Mexico, May 12, 2014.

⑤ Mariko Eguchi, Giving a Hope to a Better Solution: Personal Tips of Grant Proposal Writing (Invited Lecture),Global Partners in Education 7th Annual Conference, Universidad Regiomontano, Mexico, May 12, 2014.

⑥ 江口真理子、森本隆裕、教育用ビデオ会議設備デモンストレーション、イーストカロライナ大学島根県立大学交流シンポジウム、島根県立大学（島根県浜田市)、2013年12月19日

⑦ Mariko Eguchi, The Effect of Videoconferencing on Non-native Speakers' English Proficiency, Global Partners in Education Conference, Krosno State College, Poland, May 6, 2013.

⑧ 江口真理子、スカイプを使った日中交流が高校生の対日イメージに与える効果、第29回成蹊ディスコース研究会、成蹊大学（東京都武蔵野市)、2014年3月3日

⑨ 江口真理子、受信と発信に役立つ英字新聞作成の理論と実践、日本メディア英語学会2013年夏季セミナー(招待講演)、愛知淑徳大学(愛知県名古屋市)、2013年9月3日

⑩ 江口真理子、ディスコース分析の可能性と方法、第28回成蹊ディスコース研究会、成蹊大学(東京都武蔵野市)、2013年8月10日

〔図書〕（計１件）

① 江口真理子、メディア英語教育におけるコミュニケーション能力育成の問題、メディア英語研究への招待、河原清志・金井啓子・中西恭子・南津佳広(編)、金星堂、50-72、(291)

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
江口　真理子（EGUCHI, Mariko）
島根県立大学・総合政策学部・教授
研究者番号：００２６９５２３